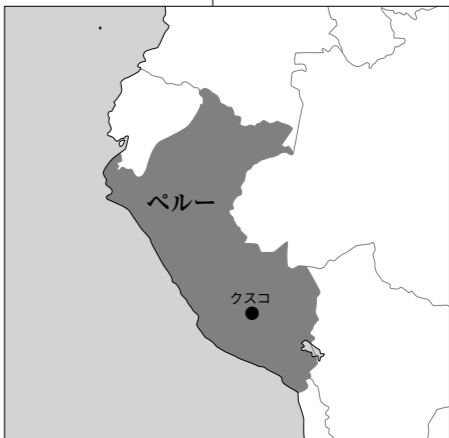


# 危機にさらされる世界遺産 登録三〇年が経過したクスコの今

八木 百合子  
民博機関研究員

文化遺産登録は、人類共通の遺産を保護し後世に引き継ぐことを目的としている。だが、経済的利益や政治的思惑に左右され、文化遺産を守り続けることが困難になる場合がある。クスコもその一例である。文化遺産をめぐる議論が尽きることはないだろう。



## 古都クスコの街並み

南米屈指の観光地として知られるクスコ。かつてインカ帝国の都として栄え、一六世紀のスペイン植民地化以降はアンデスのキリスト教布教の中心地となった街には、インカ時代の石造りの建築や荘厳な教会群をはじめ、その長い歴史の痕跡が随所に残る。大聖堂が建つ広場を中心にコロニアル様式の建物が連なる旧市街地は、歴史保護地区に指定され、一九八三年には世界遺産にも登録されてい



植民地時代に建設されたサント・ドミンゴ教会。建物はインカの太陽神殿の石組みの上に建てられている

る。クスコを訪れる観光客の数は年々増加の一途を辿っており、ペルーを訪れる外国人観光客の半数以上がクスコを目指すほどである。地元では増え続ける観光客に対応するために、宿泊施設の増強やクスコへの新国際空港の建設計画などインフラ整備に拍車がかかっている。

## 登録抹消の危機!?

ところがそのクスコが今、世界遺産登録抹消の危機にさらされているという。盛り上がる観光開発に水を差すようなニュースが大きく報じられたのは二〇一六年。火種となったの

は歴史地区に新しく建設予定のホテルである。この建物が歴史地区の建築基準に違反していることが問題となり、クスコ市と建設事業者のあいだに軋轢が生じているのだ。ホテル側は地上二階と定められた上限を大幅に超えた、地上六階・地下五階の建物を設計。二〇一五年に建設が着工され、異様な高さの建物が姿をあらわすやいなや、事態に気づいた住民らによる抗議活動や非難の声が高まった。慌てた市は工事の中止を要求。こ

れに対して建設業者は、平地の建設とは異なり、段差のある傾斜地を利用していため、事実上高さ制限に抵触しないと主張。断固として推進姿勢を崩さない。結局、二〇一五年末に市が当初付与した建設許可を無効としたことで中断を余儀なくされたが、事態はさらに訴訟にまで連れ込んでいる。

この騒動はたちまちユネスコ事務局の耳にも届いた。事の次第を重大に受け止めたユネスコは、イコモス（文化遺産の保全状況の監視をおこなうユネスコ

の諮問機関）の調査団を派遣。その結果、ホテルの規模は歴史地区の「普遍的な価値」を脅かすものであり、歴史地区が保つ調和的な景観を損なうことになりかねないとの見解を発表した。その後ユネスコは市に対して、事態が遺産に及ぼす悪影響を懸念するという警告文を発送した。これを受け、現地の関係者のあいだでは、登録が抹消されるかもしれないという危機感が生じている。

のまさに政治的混乱を利用したものだといえる。それもあ

## 世界遺産を保持し続けること

こうした騒動から考えさせられるのは、各地で世界遺産への登録が相次ぐ一方で、遺産の永続的な保護をめぐる問題、その後の行く末である。「世界遺産ブーム」のなかで、各国では登録へいかに漕ぎ着けるかという



クスコのスターバックス・コーヒー。街並みに合わせた独特の外観。歴史地区では景観保護のため派手な看板が規制されている



市内中心部の風景。赤茶色の日干し煉瓦の屋根が続く

めぐる問題だけではない。住民の反対運動は、条例を無視して強引に建設を進める巨大資本家やその進出を容認する行政に対する不満の表明でもある。じつは、建設を進めているのは外資系の大手ホテルチェーンなのである。驚いたことに、事の発端となった市の建設許可は、前議会の任期終了二日前（二〇一四年二月末）に下りていたのである。許可申請は、政権交代期

のまことに政治的混乱を利用したものだといえる。それもあ

今回の警告では、ホテルの建設が景観を損なう脅威となることが一義的な問題とされているが、まさに加速する観光開発への警鐘ともいえよう。このまま当事者たちが一步も譲らないまま膠着状態が続けば、幽霊屋敷のように建設途中で放置された建物は「負の遺産」としてネガティブなイメージとなりかねない。世界遺産に登録されて三〇年以上が経ち、自分たちの足元を見つめなおす出来事となったに違いないだろう。